

ミモザ館 (1934)

PENSION MIMOSAS

メディア 映画
ジャンル ロマン스 ドラマ
製作国 フランス
色彩 B&W
時間 110分
初公開日 1936/01
公開情報 東和

【解説】
かつてトリュフォーが、フランス映画の最も忌むべき系譜と糾弾したフェデー＝スパークのコンビの名作。フェデーの夫人だったロゼーの存在感が凜として作品を支え、やはり魅力ある映画と言えよう。’24年、南仏の海沿いの町で下宿屋ミモザ館を営むルイズ（ロゼー）は、お人好しの夫に代わって女将として宿を切り盛りしている。二人に子供はなく、親と離別した坊やを引き取って育てたが、やがて彼はパリの実父が連れ帰った。10年後、成長したその男の子ピエール（ベルナール）は賭博に耽る自堕落な生活を送り、心配したルイズは彼を連れ戻す。が、密通していた親分の情婦ネリーもその後を追う。ルイズが母としてではなく、一人の女としてピエールを愛していることを指摘したネリーは、彼女に敵意を剥き出しにし、ルイズは秘かにパリの親分を呼び寄せ、ネリーを引き渡す。一方、相変わらず浮ついた暮らしのピエールは勤め先の使い込みがバレてしまい、ルイズはそれを償うため初めて趣いたカジノで、イチかバチかの賭けを当て大金を得るが、その頃には、ネリーを失った衝撃でピエールは自殺を選んでいた……。単純なメロドラマの図式からいたずらに逸脱しようとする“心理的リアリズム”のごまかしが煩く感じられる作品である。

【クレジット】
監督 ジャック・フェデー Jacques Feyder
製作 シャルル＝フランシス・タヴィノ
脚本 ジャック・フェデー Jacques Feyder
シャルル・スパーク Charles Spaak
撮影 ロジェ・ユベール Roger Hubert
音楽 アルマン・ベルナール Armand Bernard
出演 フランソワーズ・ロゼー Francoise Rosay
ポール・ベルナール Paul Bernard
アンドレ・アレルム Andre Alerme
ジャン・マックス
アルレッティ Arletty
レイモン・コルディ Raymond Cordy